

---

## アーバン・イノベーションとしての都市祭礼——伝統から参加へ——

Urban Festivals as Urban Innovations——From Tradition to Participation——

---

有 末 賢 (亜細亜大学都市創造学部 教授)

Ken ARISUE (Director/Professor of Urban Innovation, Asia University)

---

### 〔要旨 / Abstract〕

都市祭礼研究は、文化人類学、都市社会学、都市民俗学、生活学など広範な領域で研究されてきた。筆者も1980年代から東京都中央区佃・月島の住吉神社祭礼（佃祭り）を調査研究してきた。この40年間の研究史を振り返ると、祇園祭、京都大文字送り火、川越祭りや秩父夜祭など伝統的な都市祭礼研究が中心であったが、1990年代からは、YOSAKOI ソーラン祭りを契機として、よさこい祭り、阿波踊り、ネブタ祭りなどオドリ系や移動する祭りが日本で流行しだした。本稿では、YOSAKOI ソーラン祭りを中心としたこれらの変化をアーバン・イノベーションとして捉えて、都市祭礼の革新について考察した。そこからは、伝統から参加への祭りの諸相の変化や持続可能性の課題が浮かび上がってきた。

Studies of urban festivals extend the disciplines in Cultural Anthropology, Urban Sociology, Urban Folklore and Lifology. Until 1970s and 1980s, major trends of studies of urban festivals are traditional one for example, Gion festivals, Kyoto Daimonji Okuribi, Kawagoe Matsuri and so on. But, in 1992 YOSAKAI SOURAN Festival began in Sapporo, it changed major trends of Japanese festivals. So-called Dancing systems for example YOSAKOI, AWAODORI, NEBUTA (KarasuHaneto) and so on are the social innovations as urban festivals. Their key concept of urban festivals is participation in society. At last, how is it possible to be sustainable development that the instant festivities in their major trends.

### 1. はじめに

都市祭礼研究という分野は、文化人類学、都市社会学、都市民俗学、生活学など多くの分野が競合しながら発展してきた領域である。文化人類学の米山俊直、和崎春日、都市社会学の松平誠、武田俊輔、民俗学の内田忠賢、阿南透、中野紀和など多くの研究者が綿密な調査を行っている。

本稿では、祭り研究の40年をふりかえって、日本の都市祭礼がいわゆる「伝統的都市祭礼」から「参加」を特徴とする「おどり系」の「YOSAKOI ソーラン祭り」「よさこい」「阿波踊り」などの祭りに重心を移していったことを、「アーバン・イノベーション」（都市における革新）として位置づけていきたい<sup>1</sup>。それらのきっかけは、北海道大学の学生だった長谷川岳氏（現・

参議院議員）が大学2年の時、母親がガンを患い、兄が医者として勤める高知県の病院へ入院したため、看病のために訪れた際、本場の「よさこい祭り」に接して、その臨場感に感動したことから始まっている。「こうした光景を北海道でも見られたら……」と1991年12月、学生仲間を募り5名で「YOSAKOI ソーラン祭り実行委員会」を発足させ、高知県の「よさこい祭り」と北海道の「ソーラン節」を融合させた「YOSAKOI ソーラン祭り」として企画・立案し、誕生したのが「YOSAKOI ソーラン祭り」である。1992年6月に「街は舞台だ！ 日本は変わる」を合言葉に、道内16大学の実行委員会150名で第1回 YOSAKOI ソーラン祭りを開催し、当初は参加10チーム、参加者1000人、3会場という規模だった。2000年に開催期間中の大通公園内の臨時ゴミ箱から爆発物が爆発し数名の負傷者を出



YOSAKOI ソーラン祭り

す事件が発生し、これを機に警備が強化され、第9回 YOSAKOI ソーラン祭りのファイナルコンテストが中止になった。しかし、2001年には参加チーム数が408チームと過去最多を記録し、観客動員数は、2010年に218万1000人と過去最高の動員を記録し、その後は参加チーム270～280チーム、20会場前後、観客動員数200万人前後で推移している。

この「YOSAKOI ソーラン祭り」が日本の祭礼に及ぼした影響は、相当大きなものがあって、本家の高知・よさこい祭り、同じ四国の「阿波踊り」、そして、北海道の YOSAKOI ソーラン祭りが、本州・青森、弘前の夏祭りである「ネブタ祭り」にも影響を与えているのである。この一連の現象を「アーバン・イノベーション」として位置づけ、イノベーター（革新者）は先述した長谷川岳氏らと位置付けられる。そこで、本稿では、伝統的な都市祭礼研究から研究史を振り返ることによって、何が革新されたのか、その本質に迫っていききたいと考えている。まずは、祭礼研究の40年を振り返ることにしたい。

## 2. 都市社会学と都市人類学

そこで、「祭り」研究の40年をふりかえって、日本の都市祭礼、都市祝祭の大きな変動について考察していきたい。筆者は、都市社会学を専門としているが、祭り研究は、学問的には、都市人類学、都市民俗学など

多くの分野との共同の観点から成り立っている。まず、「祭り」研究の40年としたのは、和崎春日の『民族学研究』に掲載された「京都大文字送り火」の研究論文と、筆者が和崎から学んで独自に調査した「佃住吉祭り」の研究論文<sup>3</sup>を始点に置いている。

都市祭礼研究は、都市社会学からも都市人類学からもどちらからもアプローチされてきた対象である。逆に言うと、都市社会学と都市人類学には、「都市祭礼」研究を通じて共通点が見いだされる。この点をまず初めに見ておきたい。

筆者はかつて、三田社会学会の1999年大会シンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」に参加して、翌年の『三田社会学』第5号（2000年）に「歴史学－民俗学－社会学の連続線<sup>4</sup>」という小論を書いたことがある。これは、有賀喜左衛門の社会学が、中井信彦の歴史学（社会史）と柳田国男の民俗学を一直線上でつなぐ、「連続線」になっていたことを書いたものであったが、都市人類学と都市社会学も私の中では、都市民俗学や生活学を間に挟んで、連続線上につながるものであった、と思われる。ここでは、奥井復太郎や今和次郎、権田保之助、宮本常一や磯村英一などの学者、研究者の系譜や研究関心などを挙げていくのではなく、「都市祭礼」研究という調査対象に絞って、共通点と連続線上をたどってみたい。言い換えれば、和崎の「大文字送り火」の調査と筆者の「佃住吉神社の祭り」とは何が

共通項なのか？ という課題である。

第一に、祭り、都市祭礼が複雑で複合的で、動的な動きをしている、という特徴である。これは、都市社会学だけでは捉えきれないし、文化人類学のフィールドワークの手法が活かされる場面である。第二に、祭礼の担い手、組織が「伝統的」ではあるが、村落の「宮座」のように固定的なものではなく、臨機応変に変化に対応していく、という特徴がある。東京、大阪、京都のように大都市ほど、社会変動が激しく、人類学といえども、社会学の観点が必要になってくる。そして第三に、都市祭礼は「重層的構造」と言えるような都市住民の社会層を構造化し、祭りの場面において表面化する意識や行動を捉えるのに好都合である。したがって、都市社会学、都市民俗学、都市人類学など複数の学問方法を複合化して、対象に接近していくことが必要になってくるのである。

このように、祭り研究は「都市祭礼研究」として出発した。都市社会学と都市人類学という「都市」を共有化する学問から始まったことが何よりの証拠である。

### 3. 都市祭礼研究の前身

米山俊直『祇園祭』<sup>5</sup>よりも以前の「都市祭礼研究」となると数は少なくなってくる。藺田稔らによる宗教学的<sup>6</sup>研究や中村孚美による都市人類学的<sup>7</sup>研究はあるが、一般的に民俗学、社会学からのアプローチは見られない。これは、柳田民俗学<sup>8</sup>が、村の民俗を常民の民俗と規定して、村祭りや通過儀礼、年中行事を一般化した影響が明らかに存在している。柳田は、都市の祭りを「見せる要素」がより強くなるという観察をしており、その意味では、農村と都市の祭りの特徴をよく表している。しかし、柳田は、常民の常日頃の生活、儀礼、伝承に関心を集中させており、都市民の競い合う心意や派手な風俗に対してあまり好感を抱いていなか、と思われる。初期の柳田には、山人や異界への関心もあったし、『都市と農村』や『明治大正史世相篇』など、都市民の心意伝承にも関心を払ってはいたが、中心は農村の民俗であり、歴史民俗学であった。

それに対して宮本常一『都市の祭と民俗』<sup>9</sup>は、柳田とは違った見解を示している。宮本常一は、現在の民俗、物質、文化に対して貪欲なほど関心を払っている。柳田民俗学ほど体系化はされていないが、フィールド



祇園祭

ワークの豊富さ、関心の幅は柳田よりもはるかに広い、と言える。『都市の祭と民俗』においても、「観光」にも視野を広げる現代性を有している。

現在は『日本民俗学』（日本民俗学会編集）にも都市祭礼研究が掲載されるが、1970～80年代頃には、ほとんど見当たらなかった。それに比べて、日本生活学会では、宮本常一、今和次郎、川添登など、都市の建築文化、都市大衆文化、風俗などに関する関心が高かった。さらに、米山俊直、鶴見俊輔などの京都学派の「現代風俗研究会」（通称「現風研」<sup>10</sup>）の存在も大きい。ここからは、小林多寿子、内田忠賢などが輩出されている。都市祭礼研究は、「宮座の研究」などに代表される伝統的な祭祀研究の延長線上とばかりは言えない。日本民俗学や宗教史や歴史学の成果の上で考えていくと祭り・芸能の伝統的な無形文化財的な考察になってしまう。しかし、都市民衆の伝統と変化、様々な創意工夫、栄枯盛衰を分析していく都市祭礼研究は、やはり、「西の米山、東の松平」の都市祭礼研究を待つて開始されたものである。

### 4. 西の米山、東の松平

米山俊直の京都・祇園祭、大阪・天神祭り、松平誠の川越祭り、秩父祭り、高円寺の阿波踊り研究など代表的な東西の都市祭礼研究が開始されるのは、1970年代後半からである。両者の都市祭礼研究には、もちろん違いもあるが共通点も少なくない。第一に、例外的なものもあるが、ほとんどの都市祭礼が伝統的、歴史的

なものを扱っている。祇園祭は古代・中世まで遡るが、ほとんどは江戸時代から、あるいは明治・大正期に頂点を迎えるなど各都市の歴史が刻印されている都市祭礼である。ただし、米山俊直は、神戸祭りや祭礼ではないが、「新大阪」研究<sup>11</sup>など、都市の新しい側面にも関心を抱いていた。また、松平誠も「高円寺阿波踊り」<sup>12</sup>の調査研究など神社仏閣による祭りではなくても、新たな形態にも着目していた。この点も共通点と言えよう。

第二の共通点は、祭りの担い手として、主として町内の人々、町内の組織と住民を主要な担い手と考えていた。したがって、都市祭礼は住民の年中行事であり、通過儀礼という側面が見られた。もちろん、この点は、大都市の社会変動に伴って変わってくるので、1970年代の祇園祭と2020年の祇園祭では異なってくるし、浅草三社祭でも川越祭りでも四十年、五十年と時代が変わると、変化していく面も多い。しかし、伝統的な祭りの場合、「保存会」とか「町内会」などを通して、町衆が担う祭りという主要な場面は受け継がれていく。米山も松平もそこを都市祭礼の「中核」として町内社会を考察したわけである。

第三の共通点は、大学のゼミナールなり、学生を祭礼調査に参加させる「参与観察法」を調査方法として採用している点である。大きな都市祭礼になると、同時に複数個所で行事が行われる場面も多い。そのようなときに学生たちを何か所かに配置して、参与観察や、記録させるのは祭り調査においては効果的である。また、若い学生たちは、祭りの中に入って、力仕事なども含めて役に立つ。松平誠は「集団参与観察」<sup>13</sup>という呼び名でこの質的調査法を称していたが、この調査法の特徴はいくつか考えられる。まず、研究者が採用している調査法が学生たちとは言っても、集合的であるため、相互チェックが作用しているという利点がある。ある人に聞いた情報が、学生たちも同じ情報を得て、確かめられるとか、いくつかのグループ情報を相互にチェックできるなどのメリットがある。また、祭り場面を利用して、内部に入っていくことが容易となり、町内の人々も多くの学生を利用できるメリットもある。しかし、その反面、学生たちの行動のチェック、危険が無いようにするリスク、無用な摩擦や軋轢、衝突を回避する責任など教師としての役割もかかわってくる。

米山、松平からは、このような集団参与観察法から、何人かの後継者も育ってきた。長崎くんち祭りの森田三郎<sup>14</sup>や慶應義塾大学の阿南透<sup>15</sup>、中野紀和<sup>16</sup>、谷部真吾<sup>17</sup>らも後継者といってよいだろう。和崎春日も私もある意味で米山、松平両先生から強い影響を受けているわけで、後継者と呼んでも誤りではない。

## 5. 象徴としての「都市」

「都市祭礼研究」というジャンルは、和崎が『左大文字の都市人類学』を書いた頃や筆者の「都市祭礼の重層的構造——佃・月島の祭祀組織の研究——」を執筆した頃には、確かに存在していた。その場合、「都市祭礼」の「都市」とは、担い手の町内社会を指すのだろうか、あるいは京都、大阪、東京などの大都市全体を指すのだろうか、あるいは、都市化、近代化していく社会の変動を表しているのか、何を指していたのであろうか？

京都の祇園祭、大阪の天神祭り、江戸・東京の浅草・三社祭と言うと、その都市を代表する祭礼のように聞こえるが、京都の場合でも夏の訪れを告げる「祇園祭」と京都・五山の「大文字送り火」の祭りでは、季節感も微妙に異なるし、違った祭りである。どちらが古都・京都を代表するかとなると意見が分かれるところで、どちらも京都の代表的な祭りであろう。江戸・東京の三大祭りも、浅草・三社と神田明神の祭りは入るが、かつては山王神社の「天下祭り」、今では、深川八幡の神輿、佃・住吉神社の佃まつりを数える人も多い。

つまり、都市祭礼の「都市」は、大都市や都市全域を指しているわけではない。氏子区域で言うと、京都の場合でも、東京の場合でも、ローカルな狭い地域を指している。東京都中央区佃・月島地域などは、祭りの行われる地域は、ほんの狭い地域に限られている。「都市祭礼」と言っても、担っている氏子地域にしても、町内にしても都市の中のローカルな一部である。都市祭礼の担い手がローカルな小地域に限られていると、郊外化や都心業務地域の拡大など、大都市地域の社会変動によって、参加者は極端に少なくなってくる。そこで、佃一丁目の住吉講のように、地元住民に加えて、他出家族や築地市場関係者にも門戸を開くなど、工夫することになる。このことは、祇園祭においてもマンション住民にも参加を開放するなど、大文字送り

火でも行われていることである。

世界都市化、グローバル化の今日、都市のレベルは、グローバル、ナショナル、ローカルの三つのレベルで変動している。東京、大阪、京都などの大都市では、グローバルな変化、ナショナルな変動が目立っている。それに比べると、滋賀県長浜市の「曳山祭り<sup>18</sup>」のように、ローカル・シティの都市祭礼の方が変化は少ないと言える。「長浜曳山祭り」の山組は全部で12組あり、子ども狂言（子ども歌舞伎）が演じられる山組は1年に3組演じられる。これが、かなり本格的な狂言芝居であり、男の子たちの化粧、衣装、振り付け、せりふなど相当な練習量が積まれるのである。

象徴としての「都市」とは、祭になると、祭礼の担い手がローカルな地域住民である場合、年に一度、あるいは数年に一度回ってくる、祭りの「当番」とは、その都市全体へのアイデンティティであり、一体化であるという意味で「象徴的」なのである。長浜や川越、角館、秩父などの地方都市、中小都市であると、祭礼の存在がそれだけ大きい。博多、長崎、青森、秋田、仙台などのナショナルな都市になると、祭礼が唯一の年中行事とはなくなり、一年のうちに複数の祭礼が行われている。さらに、東京、大阪、京都などのグローバルな都市になると、都市祭礼の象徴性は相対的なものとなっている。祭りの担い手も複雑になり、ローカルな地域住民だけでは担いきれなくなってきている。しかし、「都市」の象徴性が無くなってしまったわけではなく、都市民俗学など都市の象徴性を強調できる要素も残っている。例えば、町内の競い合いや町内での通過儀礼の側面、表通りと裏通り、商店、自営業の隆盛と浮沈などを都市祭礼から見ていく都市民俗学も重要な意義を持っているのである。<sup>19</sup>

## 6. 踊り系、移動する祭り、合衆型

1990年代ころから、日本の祭りのあり方に変化が萌し始めた。いわゆる、アーバン・イノベーションを起し始めたのである。徳島の阿波踊りも、高知の「よさこい祭り」も戦後既に開始されていたし、高円寺の阿波踊りも昭和30年代頃から東京の高円寺で始まっていた。しかし、本家の祭りをしのぐような札幌の「YOSAKOIソーラン祭り」が始まると、ヨサコイ系、阿波オドリ系、あるいは、沖縄のエーサーなど多くの

踊りが各地ではやりだし、日本の祭りは各地で移動して開催されるようになった。札幌の「YOSAKOI・ソーラン祭り」を中心として、ヨサコイ系の祭りを研究したのが矢島妙子<sup>20</sup>である。それはまるで、市民マラソン大会のように、東京マラソン、ホノルル・マラソンなどのように各地へ行って走るように祭りに参加するようになった。青森のねぶた祭りの行灯などは、決して青森や弘前を離れては作れないと思われていたが、90年代以降は、日本各地でネブタ祭りが行われて行灯を作成している。

これらの変化に対して、祭り研究者も様々な分類や考察をしている。松平誠『祭りのゆくえ<sup>21</sup>』において、オドリ系、伝播する祭り、風流物、イベントへ進化する祭りなどさまざまな表現を用いて分析している。また、松平は以前から都市祭礼の担い手が「町内型」から「合衆型」に変化してきたことを説いてきた。つまり、都市大衆の結衆が「町内」の絆から、選択縁的なネットワークに移行してきたことを意味する。これを「合衆型」と称しているのである。しかし、都市大衆社会は、1920年代頃から現れてきて、マスメディアの発展や普及と軌を一にして広がってきたのである。むしろ、テレビ・ラジオなどのマスメディアに代わってインターネットやスマホが普及しだした1990年代からの都市の祭りの変化は、大衆社会とはまた別の要因があるのかもしれない。

## 7. 1990年代の日本の祭りの変化

こうした変化の原因は何であろうか？ 1980年代後半から起こった日本のバブル景気と何かしら関係があるのであるか？ 本当のところはわからない。日本の祭りの構造に変化が及んできたのが、携帯電話やモバイル化と関連するのか、バーチャル・リアリティやマクドナルド化、ディズニー化社会<sup>22</sup>と関連するのか、バブル景気や消費空間のテーマパーク、ショッピング・モール化と関連するのか、などさまざまな要因を挙げることができるが、本当のところの原因はまだ突き止められてはいない。

しかし、現象としての日本の祭りの変化は、大きく次の4つの側面を持っている。第一には、伝統的、歴史的な祭りと違って、祭り＝祝祭の時間と空間が移動しても良いという点である。祇園祭や大文字送り火で

あると、毎年の時間・空間は固定される。もちろん、札幌のYOSAKOIソーラン祭りも毎年、祭りは一定で固定されているが、ヨサコイ系の団体や連は、高知のよさこい祭り、名古屋のヨサコイ祭り、朝霞のヨサコイ祭りへと遠征していく。阿波踊り系でも同じ現象が起こっている。そうであるならば、祭りの時空間は固定されない。好きな時に好きな場所へ行って踊ればよいわけである。

第二点は、特に踊り系の祭りは、コンクールのな要素を持ち始める、ということである。つまり、踊りの洗練さ、チームワーク、衣装のきれいさ、動きなど、審査員へのアピールを加えて、コンクールのな祝祭要素が加わってくると言える。ロンドンで8月末に開かれるノッティング・ヒル・カーニバルもアフリカ衣装やアフリカのデザインを競う祭りとなってきたが、それと同じ現象が見られる。<sup>24</sup>

第三は、地元性も多少は存在するが、個人の参加が強調され、同好会的な参加が基本となっている。伝統的な祭りであると、神輿同好会や曳山、鉦の同好会の参加は基本的に断られたり、嫌われたりする。もちろん、人口減少や都市の衰退が見られる地域では、同好会の参加を受け入れ、歓迎しているところもあるが、伝統的には拒否されてきた。しかし、1990年代以降の祭りの変化の中では、むしろ参加者の基本は個人の趣味であり、同好会である。従来の血縁、地縁や職縁を離れて、むしろ個人化の状況にある。純粋に「祭り好き」が集まるという個人参加型に近づいている。

第四は、身体性や儀礼の変化である。伝統的な神と人との交感や死んだ人、亡き人との交流などに対して、生きている人々との現実的なコミュニケーションが前面に出てきている。このことは、祭りの変化として、神事よりも付け祭り、町衆の賑わいを重視してきた都市祭礼の変化の延長線上にある。それは、まるで「スポーツの性格」を示すかのようである。かつて、マックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』<sup>25</sup>で述べた記述を連想させる、世俗化の進展である。

## 8. 都市祝祭の三つの「仕掛け」

都市祝祭をメディアの観点から眺めてみると大衆消費社会を特徴とする都市社会においては、祝祭の共同

性は、むしろメディアによって複製され、間接化されたものと捉えることができる。というのは、家族・親族や友人、職場の同僚など「顔見知りの人々」との間の「祝祭」ならば、それが結婚式であろうと、誕生祝や退職記念のパーティであろうと、いずれもマスメディアを媒介としない「内輪の祝祭」であり、何も都市社会に特徴的なことではない。しかし、都市における祝祭は、たとえ近所のスーパーマーケットのバーゲンセールでさえ、「新聞折り込み広告」という小さなマスメディアを利用して、少しでも「見知らぬ多くの人々」を集めようとしている。そういう意味では、都市の祝祭は本質的に「商業主義 (commercialism)」的である、といえよう。もちろん表面的には神社の祭礼や盆踊り、スポーツ大会などは「見せる」要素や「参加する」要素を祝祭の中心に置いている。祭りの「夜店」や「景品」、「物売り」などは非本質的なものと見なされる傾向があり、あまりに商業主義が強すぎると、祝祭性の聖なる部分、「儀礼性」(ritual) とかかわる部分に抵触する、と考えられやすい。たとえば、アマチュアリズムの精神を尊んできたオリンピックなどが良い例だが、最近30年くらいの傾向としては、近代オリンピックも完璧な商業主義に移行しつつある。

しかし、マスメディアの果たす役割は、単なる商業主義だけとも言えない。それは、疑似空間としての「共同性」を創造するところにある。ナショナリズムの起源と流行を、言語や活字メディアなどが創り出す「想像の共同体」(Imagined Communities) として描いたベネディクト・アンダーソンは、近代の圧倒的なメディアの発達とナショナリズムとの関係性を見抜いていた。また、『ゲーテンベルグの銀河系』(1962年) や『メディアの理解』(1964年、邦訳『メディア論』) で有名なマーシャル・マクルーハンは、あらゆるテクノロジーは、「人間の拡張」、すなわち人間の感覚能力や運動能力を外化したものであり、最初のメディアとして「話し言葉」を考えていた。そして、電気メディアによる「グローバル・ヴィレッジ」の到来を予測した半面、彼自身は、「話し言葉」と「声の文化」に人類全体の緊密な相互依存関係を託していた。<sup>26</sup>

60年代マクルーハンの「電子の人間」のオプティミズムにしる、その後70年代に「身体から遊離した人間」(discarnate man) についての彼のペシミズムにしる、

評価はともあれ、メディアの本質を人間の経験と関係性の変容として理解する視点は重要である。つまり、都市祝祭が本来的にマスメディアを必要とし、メディアによる変容が必然的となる理由は、祝祭を形成する「共同性」の変容と大きく結びついているからなのである。身近な人々との関係性や個人の願いだけを「祈る祭り」ならば宗教性と儀礼性こそが中心である。しかし、都市祝祭はたとえ「静かな祈り」が中心行事に置かれていたとしても、その周辺の猥雑な雑踏や混乱したエネルギーの発散こそが重要になってくる。都市祝祭とは、つまりメディアが内在化された文化装置なのである。

かつて、『祝祭の100年』の中で、筆者は「現代の都市空間におけるメディアと祝祭」という論文を書いた。その中で、都市祝祭の三つの「仕掛け」として、(1) ストーリー性の確保、(2) ドラマ性の確保、(3) オープン性の確保、を挙げた<sup>27</sup>。これらの指摘の本質は、今も変化していないが、現代の祝祭空間において、最も見えやすい重要な「仕掛け」は、どうやら、「参加」を確保する「オープン性」ではないかと考えるようになってきた。

ストーリー性やドラマ性は、確かに祝祭を形成する仕掛けや仕組みである。しかし、ストーリー性やドラマ性は、それらの「仕掛け」が弱くても、あるいは極端な場合、なくても祭りや祝祭は成り立つ。現在、「聖地巡礼」のような行事は、アニメやゲームなど幅広く行われているが、ストーリー性やドラマ性が乏しい「巡礼」も多い。いわゆる「オタク」だけの参加に限られているケースもある。しかし、参加者がいなくては、祭りや祝祭はもともと成立しない。

## 9. 祝祭の「仕掛け」としてのオープン性の確保

都市祝祭の特徴の一つは、参加階層の多様性であると言われている。都市住民そのものの異質性にプラスして「見せる要素」「参加する祭り」の諸相は、周辺住民や観光客が多数押し寄せることになる。その中でいかに「開かれた参加性」を確保していくのが、文化装置としての都市祝祭の一つの鍵になっているのである。

参加階層という視点から都市の祝祭やイベントを眺

めると、大きく分けて三つのポイントが指摘できるように思われる。第一に「誰にでも開かれている」という特徴は、祭りやイベントの参加が「出入り自由」というように受け取られがちである。しかし、デパートのバーゲンセールのように本当に「出入り自由」であると、かえって「参加意識」は希薄化してしまう。たとえば、佃祭りの住吉講に見られる町組（一部、二部、三部）と年齢組（世話人、大若衆、若衆）による参加の役割の違いなどは厳格な制限をすることで、かえって「参加意識」を高めているともいえる。「祇園祭」や「川越祭り」「秩父夜祭」などの伝統的な都市祭礼においても、こうした「参加階層」の制限はかなり厳格に行われている。しかし、現に参加している者たちの「参加意識」だけではなく、「誰にでも開かれている」というオープン性の方も都市祝祭にとっては重要である。

したがって第二に指摘できる点は、個人の参加と集団の参加を組み合わせるという点である。すなわち、「阿波踊り」や「よさこい鳴子踊り」などの展開は、こうしたオープン性を見事に示している。つまり、個人の参加を「連」や「チーム」といふ集団の形式で認め、「誰にでも開かれたまつり」の実現を目指している。「高円寺阿波踊り」や北海道「ヨサコイソーラン祭り」などの都市祝祭は、地域を超えた祝祭の要素を示しており、群馬県大泉町における日系ブラジル人を中心とした「大泉サンバフェスティバル」や「浅草サンバ祭り」などは、グローバルとローカルのそれぞれの要素を結び付けたオープン性を特徴としている。

第三に指摘できる点は、オープン性は単なる情報の一方的な入手だけではなく、双方向的コミュニケーションの確保に向かおうとする点である。情報化社会の今日、インターネットなどによる「祭り・イベント情報」の入手は、非常に簡単に、しかも容易に行われている。しかしこのような情報のオープン性だけでは、都市祝祭の「仕掛け」とはならない。祭り・イベントを通じたコミュニケーションのオープン性が確保されて初めて、祝祭における「解放」の気分が盛り上がってくるのである。祭りの「行事」への参加だけが重要なのではない。「浴衣姿」に着替えるだけでも「祭りの気分」を味わうことができる。「青森ねぶた祭り」における「カラスハネト」の暴走などに対して、規制や取り締まりが厳しくなっているようだが、これも一面ではディ

ス・コミュニケーションの現れなのかもしれない。祝祭において解放されるべきエネルギーは、一定のルールの中でのコミュニケーションの回路を求めているともいえるのである。以上のように、都市祝祭の「仕掛け」としてのオープン性の確保は、表面における参加階層の諸相だけではなく、参加からコミュニケーションへ、そして日常のケガレの発散というカウンター・フェスティバル（裏祭り）ともつながっている問題なのかもしれない。

## 10. 象徴としての「参加」

なぜ、象徴としての「都市」から、象徴としての「参加」へと祭礼・祝祭の軸が動いていったのだろうか？この問題は、1990年代以降の日本社会の変動にも大きく関連している。まず指摘しておかなければいけないのは、都市空間の変容である。伝統的な都市祭礼の内部空間である、神社の氏子区域やインナーシティ空間は、ジェントリフィケーションや都市再開発の波<sup>28</sup>によって、住民層の転出や都心居住など多くの変動を被っている。東京、京都、大阪などの大都市、グローバル都市に限らず、青森、盛岡、仙台、川越、桐生、秩父、博多などの地方都市においても、人口の減少や少子高齢化などは急激に進行している。まず、この点で従来型の「都市祭礼」は危機に瀕している。山車や山鉦、神輿などの文化財を「有形文化財」として登録し、祭りの行事は「無形文化財」ユネスコ文化遺産などに登録していく傾向も各地に広がっている。この傾向は、都市の側から見ると「守り」の姿勢の表れである。もちろん、古都の伝統や下町の情緒など変わらない「都市」の人気も存在しているが、決して「攻め」の態勢ではない。祭礼や祝祭には、「攻め」の姿勢が望まれるわけである。

第二に、消費空間の拡大である。もちろん、郊外化や大店法の影響などによって、駅前商店街や中心市街地の衰退という現象も関係している。しかし、2000年代以降、通信販売、ネット販売の流行によって、店舗そのものが見えなくなっている。このように消費者、大衆が集合しなくなってくると、参加の諸相は変化してくる。祭り、祝祭という場を共有しながら、ハロウィンの時の渋谷の交差点であったり、ワールドカップ大会での日本チームの勝利であったり、ロックコン

サートの盛り上がりであったり、年末のカウントダウンであったり、祝祭の「偶然性」が祭りなどの「仕掛け」の必然性を上回っていくのである。

これは、ネット販売などの消費空間が日常の空間にますます進出してくるにしたがって、かえって「消費」とは異なった参加の形式が求められており、その意味で祭りや祝祭空間が人々の「参加」欲求によって満たされてくるという仕組みではないだろうか？ その際に、ドレス・コードやコスプレ、変身などコミュニティ的な要素も強くなってきている。

第三に、象徴としての「参加」はますますグローバル化していく。2020年東京オリンピック、パラリンピックの開催や2025年大阪万博の開催など、これからもグローバルなイベント、祝祭が目白押しである。日本が高度経済成長期に開催した1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博と同じであるかどうかは、今後の準備や日本人の「心構え」にもよるが、同じように国際的、グローバルな祝祭であっても、高度経済成長期の日本のように「国家」が前面に出ていくならば、何も変わらないものになってしまう。ローカルを基礎としながらグローバルな祝祭空間を形成していく「参加」が問われているのではないだろうか。ローカルであり、グローバルである参加とは、いわば「多文化社会」「多民族社会」による参加である。アジアに開かれた祭りや祝祭が模索されていく必要があるだろう。

## 11. アーバン・イノベーションとしての都市祭礼

最後に、ソーシャル・イノベーション、アーバン・イノベーションとしての都市祭礼について考えてみたい。これは、「革新性」がどこまで持続できるのか？という問題でもある。すなわち、祭りの持続性と祝祭の「一瞬性」ということになる。国連サミットで採択された「持続可能な開発目標」(SDGs)という表現があるが、「持続可能な目標」というのは、どんな領域においても重要である。日本の都市祭礼においても、戦後の大規模な都市化、都市開発において、いくつもの「村の祭り」が消滅していった。1950年代、60年代は「祭りの危機」であって、都市祭礼研究のブームとなった1970年代は、いわば「危機の時代」を経た後の持続可能性を課題としていたのである。「都市祭礼研究」



は、確かにその持続可能性の一助となったかもしれない。米山俊直、和崎春日、松平誠らの詳細な都市の祭り研究は、祭りの担い手たちにとっても、町内や組織の細かい特徴を改めて再認識させてくれたともいえる。それによって、どのように祭礼を維持、持続させていったらいいのか、いろいろと方策を考えたものと思われる。佃1丁目におけるリバーシティ21の住民たちへの参加呼びかけや小倉祇園太鼓における「有志チーム」などさまざまな試みがなされてきた。

1990年代以降の「YOSAKOI ソーラン祭り」や「阿波踊り」「エーサー」の流行など一連の祭りの変化は、日本列島を移動する祭りの広がりであり、「想像の共同体」の祝祭空間が広がっていったわけである。その意味では、祝祭の「一瞬性」が強調されてきたともいえる。この一瞬のエネルギーの解放を、どのように持続可能な祭りのエネルギーに変えていったら良いのだろうか？

一つの答えは、参加の「つながり」を維持していくという仕組みではないだろうか？ 個人の参加と集団の参加を組み合わせていくという「仕組み」やソーシャル・キャピタル（社会関係資本）を蓄積させていくという仕組みなど、現在、いろいろと工夫されている。都市祭礼の社会関係資本が整理されてくると、ただ拡大していく消費空間も再度ネットワークによって結びついていく予想も可能になってくる。それが、持続可能な開発目標となって、祝祭の一過性に歯止めをかけていくかもしれないのである。

## 注

- 1) 本稿は、拙稿「象徴としての『都市』から象徴としての『参加』へ——「祭り」研究の四十年をふりかえって——」和崎春日先生退職記念論集『響き合うフィールド、躍動する世界』所収、刀水書房、2020年3月刊行予定、の原稿に加筆・修正を施したものである。
- 2) 和崎春日「都市の祭礼の社会人類学——左大文字をめぐる——」『民族学研究』41巻一号、1976年4月。このうち、和崎は『左大文字の都市人類学』弘文堂、1987年、同『大文字の都市人類学的研究——左大文字を中心として——』刀水書房、1996年。の名著を公刊していく。
- 3) 有末賢「都市祭礼の重層的構造——佃・月島の祭祀組織の研究——」『社会学評論』第33巻第4号（132号）1981年3月、37-62頁。なお、本論文は有末賢『現代大都市の重層的構造——都市化社会における伝統と変容——』ミネルヴァ書房、1999年の第8章（183-213頁）に収録して

いる。

- 4) 有末賢「歴史学—民俗学—社会学の連続線」『三田社会学』第5号、91-92頁、2000年7月
- 5) 米山俊直「祇園祭」中公新書、1974年。同『天神祭』中公新書、1979年。
- 6) 藺田稔『祭りと都市社会——『天下祭り』（神田祭・山王祭）調査報告（一）』『國學院大學日本文化研究所紀要』23集、1969年、宗教学的には、藺田稔『祭りの現象学』弘文堂、1990年、にまとめられている。
- 7) 中村孚美「都市と祭り——川越祭りをめぐって」『現代諸民族の宗教と文化』古野清人教授古希記念論文集、社会思想社、1972年。同「町と祭り——秋田県角館町の飾山囃子の場合——」『日本民俗学』77号、1971年9月。
- 8) 宮田登『都市民俗論の課題』未来社、1982年。
- 9) 宮本常一『都市の祭と民俗』慶友社、1961年
- 10) 現代風俗研究会（通称：現風研）は、桑原武夫、多田道太郎らを中心として学界、一般から数多く発起人が集まって、1976年9月に発足した。現代における風俗現象について、従来とは違ったさまざまな角度から調査・研究を行い、社会を新しくとらえなおしていくことを目的として、京都を中心として20年にわたって活発な活動を続けている。
- 11) 米山俊直・橋本敏子『生活学のプラクシス——生活史による「新大阪」の研究——』（生活学選書）ドメス出版、1990年4月。
- 12) 松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、1990年、特に「高円寺阿波踊り」については、「第3章 非伝統的都市祝祭」を参照。
- 13) 松平、前掲の序論に「集団の実態調査の方法的基礎」として、「調査に当たっては、謎解きを繰り返していく問題発見型の方法である。」と述べたうえで、集団参加観察の三要素として、①調査集団による対象集団への共同参加、②調査集団による共時的共同観察、③ ①と②を客観化するための統一的手法の適用（同書、55頁）を挙げている。
- 14) 森田三郎「長崎くんち考——都市祭礼の社会的機能について——」『季刊人類学』11巻1号、1980年。
- 15) 阿南透「青森ねぶたとカラスハネト」日本生活学会編『生活学 第24冊 祝祭の100年』所収、175-198頁。ドメス出版、2000年9月。
- 16) 中野紀和「視線の力」日本生活学会編、2000年、79-101頁。主著は、中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学——記憶・場所・身体——』古今書院、2007年。
- 17) 谷部真吾「見せる祭りを目指す実践の誕生」日本生活学会編、2000年、61-87頁。
- 18) 武田俊輔『コモンズとしての都市祭礼——長浜曳山祭りの都市社会学——』（新曜社、2019年）は、長浜の町と祭りを生き生きと描いた優れた業績である。また、都市社会学・地域社会学からアプローチした祭り研究として、竹元秀樹『祭りと地方都市——都市コミュニティの再興——』、新曜社、2014年、は、都城市の「おかげ祭り」を調査している。

- 19) 有末賢、内田忠賢、倉石忠彦、小林忠雄の4名は、『都市民俗生活誌』全3巻(明石書店、2002~05年)と『都市民俗基本論文集』4巻、別冊2冊(八木橋伸浩編)(岩田書院、2009~12年)を編集し、発行した。
- 20) 矢島妙子「祝祭の受容と展開」日本生活学会編、2000年、148-174頁。主著は矢島妙子『「よさこい系」祭りの都市民俗学』岩田書院、2015年。
- 21) 松平誠『祭りのゆくえ——都市祝祭新論——』中央公論社、2008年
- 22) ジョージ・リッツァ(正岡寛司監訳)『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、1999年5月。
- 23) アラン・ブライアン(能登路雅子監訳・森岡洋二訳)『ディズニー化する社会——文化・消費・労働とグローバルイゼーション——』明石書店、2002年。
- 24) ロンドンにおけるカリブ海諸島のトリニダードからの移民の祭りとして有名なノッティング・ヒル・カーニバルを調査したパトリシア・アレンネーディとマースは、カーニバルで競われているアフリカ部族の仮装衣装の部族芸術(Tribal Arts)は、単なるカリブ海諸島からのロンドンへの移民たちのカーニバルとしての性格を超えていると指摘している。一九九三年以来、カール・ガブリエルというバンドリーダーで専門のデザイナーが参加することから、カーニバルの部族芸術にはエキゾチズム(異国趣味)のアフリカ色ではなく、重層的な「想像されたコミュニティ」の性格が刻まれることになった。彼女はカーニバルに登場するアフリカの仮面や仮装が少なくとも四つの「アフリカ性」を兼ね備えていると指摘している。つまり、第一にトリニダードの人々のエスニシティ(民族性)であるアフリカン・カリヴィアの「アフリカ性」である。大都会。ロンドンに離散していたカリブ海黒人が集うという意味でのアフリカ性である。そして、第二に奴隷化され、植民地化されたアフリカの歴史のトラウマの「克服」というアフリカ性が刻印されている。つまり、「私たちは一度エスニシティを剥奪されたのだ」という西欧文化、欧米文化の植民地主義、帝国主義への「抵抗」の精神である。現代的に言うならば、ポストコロニアリズム(脱植民地主義)の表現と言うことになるかもしれない。第三は、視覚的に表現された部族芸術の「文化遺産」が示しているアフリカ性である。トゥチ(Tutsi)族や中央アフリカのバクバ(Bakuba)族、カメルーン共和国のデュラ(Dura)族、象牙海岸(アイボリー・コースト)のウンゲレ・ウォブ(Ngere Wobe)族など、部族の王や女王を模した仮面や仮装は、もちろん見るからに「アフリカ性」を表現している。そして、第四には故郷としての「アフリカ性」である。これは、第一の故郷としてのトリニダードが持っているアフリカ性をはるかに超えて、想像のコミュニティとしての「アフリカ性」であるといえる。そこには、ネイティブとしてのアフリカ人、ホームランドとしてのアフリカを共有する世界中の人々が想像の上でつながっているということである。Patricia Alleyne-Dettmers 1997 TRIBAL ARTS: A case study of global compressin in the Notting Hill Carnival, in John Eade(ed.), *Living the Global City; Globalization as a local process*, Routledge London.
- 25) マックス・ウェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、「営利のもっとも自由な領域であるアメリカ合衆国では、営利活動は禁欲的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格をおびることさえ稀ではない。」と記述している。マックス・ウェーバー(大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』268頁、岩波書店、1988年。
- 26) 浜日出夫「マクラーハンとグールド」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉(編集委員)『岩波講座 現代社会学22 メディアと情報化の社会学』岩波書店、97-112頁、1996年、参照。
- 27) 有末賢「現代の都市空間におけるメディアと祝祭」日本生活学会編『生活学 第24冊 祝祭の100年』所収、261-282頁。ドメス出版、2000年9月。
- 28) ニール・スミス(原口剛訳)『ジェントリフィケーションと報復都市』ミネルヴァ書房、2014年。
- 29) 有末賢「都市社会学とソーシャル・イノベーション」『亜細亜大学 都市創造学研究』創刊号、61-69頁。2017年3月、参照。